

II-31

北上川流域の時代変遷

岩手大学工学部 学生員 ○小野寺 隆 学生員 清水 尚志
 澤田 晃二 正 員 堺 茂樹
 正 員 平山 健一

1 はじめに

有史以来、北上川は流域社会と密接な関連性をもちながら、互いに少なからぬ影響を与えてきた。これまでに公表されている年表を再編集し、出来るだけ詳しい年表を作成した。この年表をもとにこれまでの北上川と流域社会の係わりに付いて考察してみた。本報告では、特に、洪水の発生に関する記述がどのような頻度で年表に現れているかを述べて、新田の開発や河川改修などの記述など、その背景となる社会の変化との関連に付いて考察している。

2 北上川の洪水

北上川の年表で、比較的記録の残存している1600年以降、まず目につくのが洪水である。図-1（中段）は、洪水に関する記述の頻度を示している。年表に現れた洪水の記述は1600年以降現在に至るおよそ400年間に322回、つまり年に0.8回の頻度で発生している。また、1700年以降1950年頃までは発生頻度が大きいことが分かる。1960年以降は発生回数が減っている。年表の記事により、洪水の発生場所をまとめると図-2が得られる。北上川中流部（一関から岩手宮城県境までの狭搾部）が149回で最も多く、次いで胆沢扇状地・江刺地方など北上川本川・胆沢川・人首川流域、宮城県内の下流部、一関・平泉地区の順となっている。最近ではほとんど洪水が起きていない盛岡・雫石地区の洪水記録も以外に多い。

3 洪水の発生と新田開発、河川改修等との関連

図1の上段には、農業用水のための堰の建設、新田の開発、用水路の整備など水田の整備、稲作の発展に関する記述の度数を年度毎に示した。また、下段には堤防工事、河川改修工事、ダムの建設など河川整備の記述を示した。

上段の米作に関する記述は1550年頃より増えてくるが、戦国時代が終わり領地を安堵された大名が競って米作に力を入れたことが想像される。茂井羅堰、鹿妻堰、寿庵堰等はこの時代に建設されている。それと共に洪水の発生度数も増えていることは、新田の開発が北上川の水の得易い低湿地でも行われ、生活の場も洪水に対して安全な土地から川沿いに移っているためであろう。1700年頃から約200年の江戸時代中期以降は、南部藩、伊達藩共に新田の積極的な開発は休止し稲作の振興に関する記述は非常に少ない。ようやく明治中期になって、人口の著しい増加や富国強兵の国策による稲作の振興が行われ、敗戦による食料増産をへて現在に至っている。

下段をみると1600年代に新田の開発と共に堤防工事の記述が見られるが、それ以降の江戸時代には記述は少なく、①伊達宗直の河道付け替え工事、②伊達政宗・川村孫兵衛の河道付け替え工事、③木村勘助による日形堤防築堤、④盛岡城・花巻城の北上川河道付け替え工事等である。しかし、年表から見てもこれらにより洪水がなくなったもしくは減ったとは言い難いようである。明治初年からの河川工事も舟運のための低水工事に重きが置かれ、東北本線が盛岡まで開通した1889年を過ぎた1910年代に至ってやっと低水工事が終了し、下流宮城県側から高水工事がスタートする。しかしながら当時の洪水の発生状況からみると、北上川の特に岩手県側は、依然、洪水に対してほとんど無防備の状況にあったようである。やっと1947年、48年のカサリン、アイオンの両台風の水害をへて、本格的な河川改修、ダム建設が進められ、1950年頃からは河川改修の記述が年表を賑わせている。下段の黒塗りの事例は、石測ダム、田瀬ダム、湯田ダム、四十四田ダム、御所ダムの順で完成した北上川5大ダムの記述であるが、これらのダムの完成は洪水の減少に大きな影響を与えたことは明きらかである。

4 あとがき

年表を通して北上川と流域社会の係わりに付いて見ることにより、これまでの経過を理解出来ることが分かったが、この様な手法により、更にどのような有益な知見を得られるか研究を進めていきたい。

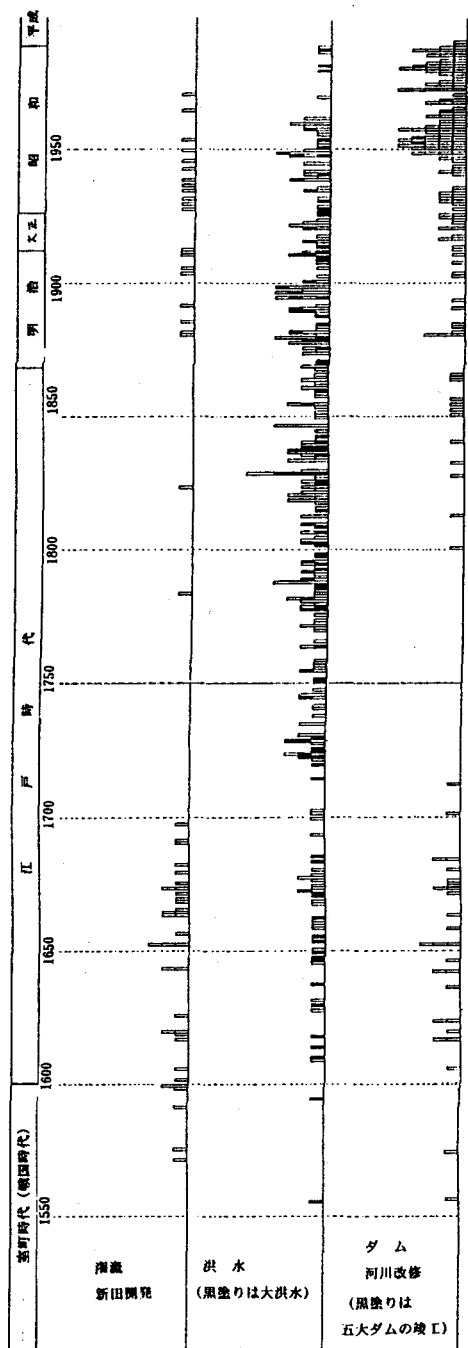
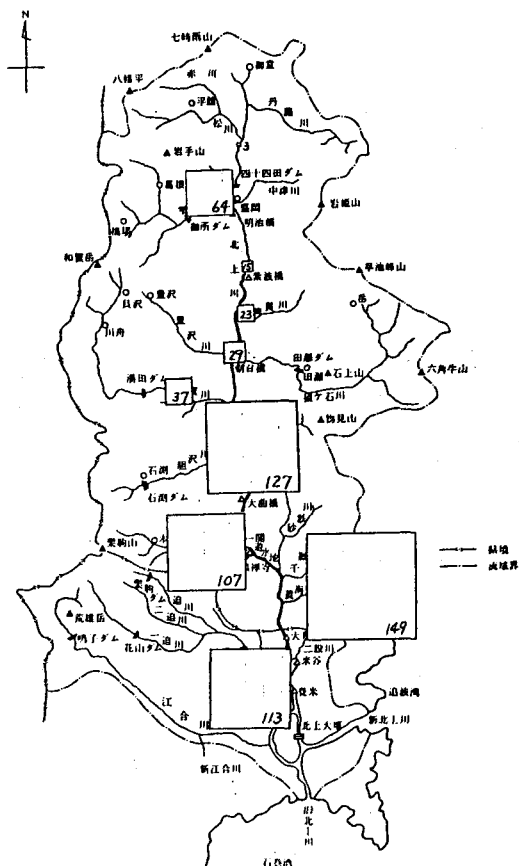


図 - 1

北上川年表 事項別出現回数
年表出現回数 1 回につき、1 目盛



北上川 洪水発生地域の分布
(年表出現回数)

参考文献

- 1) 東北地方建設局岩手工務事務所
北上川 第 1 輯～第 9 輯
- 2) 建設省東北地方建設局
北上川百十年史
- 3) 向井清孝
イーハトーブの国土造り